

美濃陶磁歴史館だより



連続 うちんたあのお宝、なんやね？
 コラム 第24回 妻木の熊谷吉兵衛② 江戸に出る

弘化3年（1846）、多治見の大陶商「西浦屋」は大阪の西横堀瀬戸物町に支店を構えます。

ちょうどこの年は、113月に江戸で大火が起き、西浦屋の得意先の瀬戸物問屋数軒が焼失。そのうち経営の立ち行かなくなった「近江屋喜兵衛」から、西浦屋は江戸での経営権を譲り受けることとなります。そして、翌年3月に日本橋堀留町に支店（江戸堀留店）を開店しました。

こうして、西浦屋は多治見本店に加え、大阪・江戸と大都市に支店を構え、美濃焼広域流通を一手に掌握する体制を整えました。この3店舗体制を造り上げたのが、このときはまだ五郎兵衛と名乗っていた西浦屋次代当主三代円治と補佐役の熊谷吉兵衛でした。

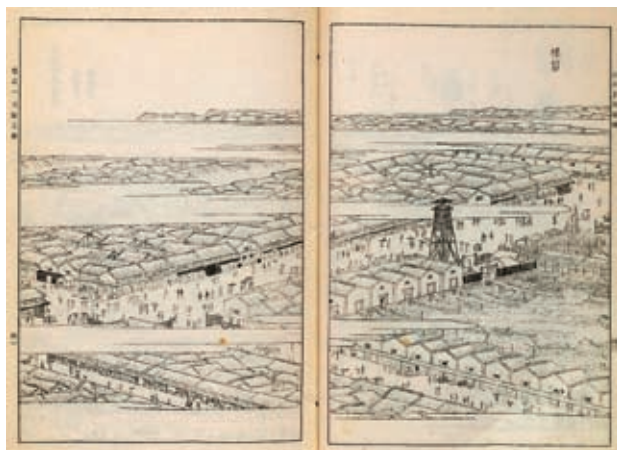
そして、西浦屋は江戸店の命運を吉兵衛に託し、支配人として江戸へ

派遣します。吉兵衛数えで34歳、家族を伴っての江戸移住でした。吉兵衛は、嘉永5年（1852）に記した書状の中で、三十四より出国、それより今日までけなげにも丹精仕り候」と、江戸店開店の年から店のために懸命に尽くしてきたと記しています。

その言葉に違わず、江戸堀留店は急成長を遂げ、開業2年で従来の瀬戸物問屋からねたみを買うほどになっていました。4人の店員から始まった江戸堀留店は、20年後の慶応3年（1867）には従業員15人、取扱商品は美濃焼に加え、瀬戸、京、信楽、肥前（有田）にまで手を広げ、取引範囲は関東一円から東北の太平洋側一帯におよぶ大店へと成長を遂げていました。万延元年（1860）には、開港した横浜で外国向けの取引も開始しました。



三代西浦円治（五郎兵衛）
 幕末（19世紀）
 多治見市図書館郷土資料室提供



『江戸名所図会』巻之一より「堀留」
 西浦屋支店のあった日本橋堀留町の様子
 国会図書館デジタルコレクション



伝・熊谷吉兵衛
 明治初頭（19世紀）

講座のご案内

企画展 妻木の熊谷吉兵衛
 — 美濃の大陶商「西浦屋」を支えた人 — 関連講座

展示期間
 2/26(日)まで

第1回「熊谷吉兵衛の生涯」 1月21日(土)

講師：春日美海（土岐市美濃陶磁歴史館学芸員）

第2回「吉兵衛から円治への手紙を読み解く」 2月4日(土)

講師：岩井美和氏（多治見市文化財保護センター学芸員）

時間：午後1時30分～3時 会場：セラトピア土岐・3階大会議室 ※参加無料

定員：65人 ※事前申込制（電話またはメール toki_museum@toki-bunka.or.jp）

美濃陶磁歴史館
 ☎ 1245